

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

Research on Teaching Unprepared Student in
Higher Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 拓雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/939

研究論文

高等教育における準備不足学生の教育に関する研究

Research on Teaching Unprepared Student in Higher Education

宇田川 拓 雄*

Takuo UTAGAWA

<要約>

準備不足学生とは大学教育をうける準備が十分でない学生のことで、中退する可能性が大きい。大卒資格は有利な職業へのパスポートであるため、学生にとって中退は何としても避けたい。大学も高い中退率を放置すると学生数の減少と大学の評判低下を招き経営に支障を来す。効果的な中退対策が学生にも大学にも是非必要である。中退の理由は経済的理由、進路変更、学業不振など様々だが、本稿では政府の高等教育政策や大学の経営管理運営レベルでは取り上げられないことがない欠席の問題を論じたい。授業担当者にとって学生の欠席はなじみ深い出来事であり、欠席が成績低下や中退に至る例を数多く見ている。しかし学生が4年間無遅刻無欠席でいるのは現実的にはきわめて難しい。筆者は小規模な私立文系の非難関大学の授業の課題評価のデータから、学生が欠席による損失を人間関係のネットワークで穴埋めするスキルを持たずに入学してきた可能性があることを見いだした。そのような学生は準備不足学生と考えられる。欠席を防止し中退を減らすには人間関係対応のスキル不足を補うため、大学が人間関係のネットワーク作りを支援する仕組みを作ることが効果的である。

<キーワード>

高等教育、準備不足学生、中退防止、欠席、学生の成功、人間関係のネットワーク

1 はじめに

本稿では、準備不足学生の教育とその対策に関する研究報告を行う。

準備不足学生とは英語の **unprepared student** の和訳である。at-risk student (落ちこぼれの恐れのある学生) ともいう。アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) では学生の教育指導に関する議論の中やマスメディアの報道の中でよく見かけるが、はっきりした定義はない。

ここでは「準備不足学生」を「大学教育を受ける準備が十分にできていない学生」という

* 嘉悦大学経営経済研究所 客員教授

意味で用いる。準備不足学生は「良い学生」とは言えず中途退学（以下、中退）する可能性も大きい「中退予備軍」である。準備不足学生を上手に教育できれば中退防止に役立ち、学生のためにもなり、高学歴人材を育成するという大学の使命も果たせることになる。

中退は教室レベル、大学レベル、社会（地域、全国）レベル、あるいは国外レベルで生じる様々な要因が原因となって誘発される。ここでは授業担当者の観点で中退防止対策について考察するが、特に中退を誘発する主要な要因の1つと考えられる欠席に注目する。授業担当者に馴染み深い欠席の背景を分析し、有効な教育指導法の検討を行いたい。

2 準備不足学生

2.1 中退について

日本では現状では中退率を公表している大学は少ないが、政府は大学改革の一環として、大学に中退率の公開を義務づける方針である。

大学や大学教員は伝統的には必ずしも欠席を重大問題としては捉えていなかった。しかし18歳人口の大学進学率が上昇し、大学進学者が同世代の半数を超えるようになった現在では、中退につながる可能性が高い欠席の問題を見逃ごすことはできなくなっている。多数が大卒資格を持つ現状でも賃金プレミアムは非大卒に比べて大きい。この状況では大学に進学して、順調に卒業し、有利な職業に就き、安定した豊かな生活を送ることを希望する若者が多くなるのは当然であろう。中退は学生のこのような希望を打ち砕いてしまう。

高等教育進学者が同世代人口の半数を超える「ユニバーサル段階」ではミドルクラス層が大学生の大半を占める。子どもを大学に進ませるのは経済的余裕が十分にある家族ばかりではない。親が無理をして、あるいは学生自身が働いたり借金（ローン）をしたりして通学するケースが少なくない。中退すると投資した経費の回収が難しくなる。この場合、戦略としては大学選択時に「良い企業に就職しやすい大学」や「中退率の低い大学」を選ぶのは合理的な判断である。すると中退率の大きな大学への受験生は減少し、経営にも差し支えるようになる。中退防止は大学にとっても重大問題である。

2.2 準備不足学生の特徴

準備不足学生は問題を抱えた学生であって、授業担当者からみて次のような特徴の全て、あるいはいずれかを持った学生を指すと考えよう。

基礎学力が低い、大学での成績が悪い、取得単位が少ない、学習意欲が低い、遅刻が多い、欠席が多い、授業中の態度が悪い（授業途中で教室を出て行く、私語が多い、スマホで遊んでいる、飲食をするなど）、課題を提出しない、提出物の期限を守らない、教科書を買わない、教科書を授業に持ってこない、教員への行儀が悪い、将来の計画を持っていない

学生のこのような特徴や行動は授業担当者にとっては特段に珍しいものではない。準備不足学生は学力が高い難関大学では少なく、学力がかなり低くても容易に入学できる非難関大学に多いという指摘は経験的に納得できる。

2.3 準備不足学生の概念

準備不足の生徒 (*unprepared pupils*) はアメリカでは日常的な表現で、小中学校などで教科書や筆記用具を忘れた状態を「準備ができていない」と表現する。「準備不足の児童生徒に教員はどのように対応するのが良いか」という議論が多数行われている。例えば、筆記用具を忘れた場合は学校の備品を貸与する、教科書の場合は、スペアは一冊程度しかないのが普通なので、別のクラスの生徒に借りるように指導する、根本的対策としては前日に翌日の持参学用品のリストを確認させる、準備してきた生徒にポイントを与える、さらには教科書を含む学用品は自宅に持ち帰らせず学校のロッカーに保管させるなどといった究極の対策まである。

大学生の場合は、戦前は準備不足は問題にならなかったようだが、第2次大戦後、学生数が急増し始めた1950年代に言及が始まっている。英語と数学の学力が低く、大学での授業についていけない学生を準備不足学生 (*unprepared student*) と呼び始めた (Williams 1954)。

2.4 反対語、類似語

準備不足学生の反対語は「大学教育を受ける準備ができている学生」で *prepared student* といいそうだが、これは用語としては一般的ではない。*college-ready student* (大学への準備ができている学生) という表現や *college readiness of student* (大学生の準備状態) という言い方があり入学時に選考を行う大学で、応募学生の適性評価時に使われている。

似た言葉で「どんな学生でも、準備のできていない学生でも、受け入れて教育する大学」という意味の *Student-Ready College* があるが、これは「大学は、学生が大学の基準に合っているかどうかではなく、大学が学生にあっているかどうかを問題にすべきだ」という主張で書かれた書籍のタイトルでもある (McNair 2016)。学生の教育や成功を考えればこちらの方が良い方針であるようにも思われる。しかし、社会が大学に期待する高度な知識とスキルを持った人材を育成する役割に応えるには、欠席癖の学生や極端な低学力学生を卒業させるわけにはいかない。大学が *Student-Ready* であることは望ましいことだが、その実現には困難が多いだろう。

3 先行研究

3.1 準備不足学生と中退について

準備不足学生という用語は日本の高等教育の関係者のコミュニティでは一般的ではない。『大学改革を成功に導くキーワード30』(濱名篤 他 2013) にも、文部科学省の『我が国の

高等教育の将来像（答申）』の用語解説（中央教育審議会 2005）にも準備不足学生という用語の記載はない。

準備不足児童生徒の特徴的行動は、初等中等教育では「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題」として扱われ、次のような項目に関して全国調査が行われている（文部科学省 2019）：暴力行為、いじめ、出席停止、長期欠席（不登校等）、高等学校中途退学、自殺、教育相談。

高等教育では中退者は休学者、授業料滞納者とともに論じられているが、準備不足学生への言及はない（文部科学省 2005）。中退の実態把握と分析についての研究も行われている（文部科学省 2016）がそこでの関心は中退の原因に迫るものではない。

3.2 EUにおける中退研究

ヨーロッパでは欧州委員会が報告書『ヨーロッパの高等教育における中途退学と卒業』（Dropout and Completion in Higher Education in Europe）（European Commission 2015）を作成し調査結果の重要な知見として（学生の）「学業の成功」（study success）がヨーロッパの国々の高等教育政策の重要な課題であると述べている。政府と高等教育機関の政策立案における学業の成功の定義は様々に異なるが、「卒業率」、「学位取得までの年数」、「中途退学率」の3つを指標として分析を行っている。各国がとっている政策を「財政政策」（Financial Policies）、「制度政策」（Organizational Policies：入学資格のコントロール、進路の複線化、年限を短縮した学位の授与などの政策）、「情報提供・支援実施政策」（Information & Support Policies：入学前後に学生に情報と金銭以外の支援を与える）に分類している。この報告書は2005年から2014年までに行われた調査に基づいた各国の政策レベルの状況の報告で、最新のものではないが、日本の大学で中退防止策の検討に参考になるとと思われる。

報告書の事例研究の部分で、学生の出欠と学習の進捗状況をモニターし中退の危険のある学生を把握し、カウンセリング（相談援助型指導）、コーチング（能力開発型指導）、メンタリング（助言者型指導）による大学としての支援の継続を行っている例が報告されている。それによれば全員参加のチュータリングシステムと学生同士のメンタリングの仕組みを作り、学生コミュニティの組織化と所属感・関与感の涵養により、学生同士の関係と大学の教育支援プログラムへの関係の強化を行っている大学もある。この部分の報告は、本稿のテーマである欠席対策と、学生の大学の組織や人間関係との関与の強化の問題を扱っている。

3.3 アメリカにおける準備不足学生の教育

アメリカの高等教育コミュニティでは準備不足学生の教育は大きな関心事である。準備不足学生をどのように教えるかに関する書籍、報告書、研究は数多い。日本と異なり、教授法に関する記述は相対的に少ない。代表的な1冊である『準備不足学生の教授～高等教育における【学生の】成功と学業継続を促進するための戦略』（Teaching Unprepared Students:

Strategies for Promoting Success and Retention in Higher Education) (Gabriel 2008) の章構成は次のとおりである。【筆者による試訳】

1. 準備不足学生の概念の説明
2. 準備不足学生の教育のための哲学（基本的考え方）
3. 1 回目の授業で行うこと
4. 出席の意味と【出席の】重要性の解説
5. 学習に関する知識
6. 学生の学習をめざす教育
7. 評価と教授（ティーチング）
8. 教授法

出席に関する解説のページは 40 ページ以上ある。欠席対策が学生指導の重要項目となっている。日本では教育改革や教育方法の改善で広く取り上げられている教授法に関する項目のページは本文全体（117 ページ）のうち 14 ページしかない。

3.4 中退や休学の原因としての欠席

授業担当者にとって学生の欠席や遅刻は珍しくはないが、授業の実施や教育の質には大きな障害である。欠席は中退につながる可能性も大きい。

文部科学省の調査報告『学生の中途退学や休学等の状況について』（平成 26 年 9 月 25 日）によれば、年間中退率は 2.65%、中退者数は 79,311 人であり、中退理由は次のとおりである。

- | | | | |
|---|-------|----------|---------|
| 1 | 経済的理由 | 16,181 人 | (20.4%) |
| 2 | 転学 | 12,240 人 | (15.4%) |
| 3 | 学業不振 | 11,503 人 | (14.5%) |
| 4 | 就職 | 10,627 人 | (13.4%) |

ここには欠席が含まれていない。学業不振が中退の主な要因の 1 つであり、その比率は、平成 19 年度が 12.7% で、今回の調査、平成 24 年度には 14.5% と増加している。この調査は国公立大学、短期大学、高等専門学校のを対象とし、回答率 97.6% であって、ほぼ日本の高等教育における中退の現状を反映していると思われる。

学業不振を試験の成績が悪いこと、単位がとれないことだと考えると、それは第 1 に学生の責任である。同じ授業を受けても相当数の学生は単位をとっているから、成績が悪いのは当該学生が勉強しないことが原因であろう。成績が悪い学生には教員としては分かりやすい授業を行ったり、学生に勉強するように促したりする以外に対応策は思い浮かばない。

学業不振は中退の原因の1つであるが、学業不振にもいろいろな原因がある。欠席は学業不振の大きな原因と考えられる。教員は学生の理解力と学力に配慮しつつ授業を行っているが、出席してこない学生は指導できない。我々は日常的に目にする学生の欠席が最終的に中退につながる事例を数多く見ている。

全国のハローワーク（公共職業安定所）を利用する大学等中退者（回収数：1,107票）を対象とした調査「大学等を中途退学された方の働き方と意識に関する調査」（労働政策研究・研修機構 2015）によれば中退理由（複数回答）は多い順に次の通りである。

- 「勉強に興味・関心が持てなかったから」・・・49.5%
- 「単位が不足したから」・・・・・・・・・・41.7%
- 「経済的に苦しかったから」・・・・・・・・27.3%
- 「仕事をしたいと思ったから」・・・・20.4%
- 「友だちとうまく関われなかったから」・・・20.3%
- 「遅刻や欠席が多かったから」・・・・・・・・20.1%

この報告では「遅刻、欠席」を、複数回答で約1/5の学生が中退理由として選んでいる。調査対象は大学中退者のうち就労意欲のある者に限定されており、大学中退者の全体的傾向を把握しているものではないが、中退に向かう在学時の学生の状況を良く表しているように思われる。

授業担当者にとって欠席は対応に苦慮する「困りごと」の1つである。西森（西森 1999）は日本数学会・大学数学基礎教育のワーキンググループの調査結果を紹介している。授業担当者の困りごと5項目に関するアンケート調査の結果は次のとおりであった（複数回答）。

- (1) 反応がない・・・・・・・・・・54%
- (2) 受講生の数が多すぎる・・・・・・・・51%
- (3) 私語・・・・・・・・・・33%
- (4) 欠席・・・・・・・・・・22%
- (5) 遅刻・・・・・・・・・・21%
- ・無回答・・・・・・・・・・19%

欠席は困りごとの4位であった。このリストのうち「欠席」以外は教室での対応が可能だが、出席していない学生には教室で対応できない。

3.5 学力について

大学生の学力、特に非難関大学（いわゆる低偏差値の大学）の学生の学力が低いことが教

育上の問題になっている。しかし大学は学生を入学させた以上は教育を行う義務がある。基礎学力が乏しいことで学生を責めることはできない。学生の学力不足は入学前教育や補習授業などで補うという対策が考えられるが、授業担当者としては、出席している学生の学力を前提として授業を行わねばならない。

非難関大学の教員は低学力の学生でも合格できるような授業を工夫している。エリート職をめざす高学力学生の多い研究大学と同じ水準、同じ教育目標、同じ授業方法で授業を行ってれば合格者がいなくなってしまうかもしれない。教員は高等教育の専門的科目として授業の教育水準を維持しつつ、学生の理解力や卒業後の進路を考慮し、大多数の学生にとって無理のない水準の授業を工夫している。しかしその工夫も欠席学生には意味がない。

近年、大学教育の質の担保、教育成果の可視化、教員の教授能力向上のための効果的なFDプログラムなどに関する研究が増えている。アクティブラーニング、クリッカー、反転授業、ルーブリック、参加型授業、フィールドワーク、スタディツアーなど様々な教授法が開発され提案されている。それらは毎回の授業に出席し、学習意欲の高い学生には有効だろうが、教室にいない学生には効果はない。

3.6 社会的行為としての欠席の理由と言い訳

大学の授業は学生が欠席することを想定して設計されていない。欠席学生の教育は授業の枠を超えている。欠席は教育にとって好ましいことではないため、欠席に関する規定、例えば5回以上欠席すれば最終試験の受験を認めないなどを学則に記載している大学は多い。しかし伝統的には大学は欠席を厳しく管理することはなかったため、この伝統に従う形で、学生は、当該授業の担当教員が特に厳しくしない限り、ある程度自由に欠席しているのが現状ではないだろうか。欠席理由が本人の対応が不可能なもの（例えば家族収入の激減、怪我や病気、肉親の葬儀など）でない場合について欠席が中退にいたるパターンを考えてみた。

パターン1：欠席する→回数により試験が受けられなくなる→不合格となる→単位がとれない

パターン2：欠席する→授業が分からなくなる→受講を取消す→単位がとれない

パターン3：欠席する→授業が分からなくなる→試験放棄→不合格→単位がとれない

パターン4：欠席する→授業が分からなくなる→試験で不正解→不合格→単位がとれない
どのパターンでも不利な結果につながる。欠席する学生は欠席が不幸な結末につながるという、この自明な理屈が理解できないのだろうか。

学生はなぜ欠席するのか。欠席は学生が自ら選択して実行する行為と考えられる。オサリバンらが行った「欠席に関する理由（言い訳）」の研究が参考になる。オサリバンらは「“I Did Not Miss Any, Only When I Had a Valid Reason”: Accounting for Absences from Sociology Classes (『【欠席しても】正当な理由がありさえすれば失うものは何もなかった—社会学の授業の欠席の釈明』)と題する論文で学生による欠席理由の説明の分析結果を報告している(O'Sullivan,

S. et al. 2014)。学生たちは事故や災害や病気（これらはめったに生じない）以外の原因によって授業を欠席したことについて、いろいろな弁解と正当化による理由付けをしている。学生は欠席を学生生活における行っても構わない選択肢（オプション）と見ていることが明らかになった。学生は欠席しても「悪いことをした」、「欠席して損をした」とは考えていない。学生は間違っただけで欠席したのでもない。背後には複数の行動規範（行動のルール）の衝突があると考えられる。

真に不可避な場合以外の欠席（そして中退）行動は1つ、ないし少数の要因によって機械的に引き起こされるのではなく、様々な要因と条件の中でダイナミックに、行為者が自ら主体的に選択する社会的行為（social action）と見ることができる。

このような欠席行動は人間を合理的な存在とみる「経済人モデル」や、人間行動の心理的感情的側面を強調する「行動経済学モデル」ではうまく説明できない。欠席を社会的行為とみることが、それが合理的な損得勘定や、情緒や気分によって影響されるのではなく、行為主体が内面化している社会規範に従って、状況の中の様々な要因、例えばカリキュラム、学則、教員の態度、欠席に関する友人の意見など、を勘案して行われていると考えることである。チルド（Child 2006）は大学生の準拠集団の研究で、大学生の行動の志向（orientation）に家族の価値観に対する態度が影響を与えていることを明らかにしている。ティント（Tinto, V. 1987）は効果的な中退防止は学生が学内の勉強コミュニティや社会的コミュニティと強く結びついているという感覚を構築することにかかっていると述べている。いずれも経験に基づいた知見であって、中退につながる可能性のある欠席行動を社会的行為とみて、その背後にある準拠集団や社会規範に言及しつつ理論的分析をしている先行研究とは言えない。

欠席を社会的行為と見ることが、筆者がこれまでに折りに触れてプライベートに学生から聞き取った次のような欠席理由の理解に役立つ。

- (a) 寝坊した
- (b) 体調が悪かった（病院には行かなかった）
- (c) インフルエンザになった
- (d) アルバイトのシフトが入った
- (e) 祖母を病院に連れて行った
- (f) 電車が遅れた
- (g) 電車に乗り遅れた
- (h) （自家用車通学で）道路が渋滞していた
- (i) 友達と遊びにいった
- (j) デート相手の都合で、その日しか空いていなかった
- (k) 部活動の試合があった
- (l) 部活動で前任の顧問の葬儀に参列した

このうち (c) の法律で出席停止が命じられるインフルエンザ罹患以外はいずれも個人レベルでの対応が可能であろう。「寝坊」は早寝する、「体調」は普段から健康管理する、「アルバイト」は授業に差し支えないようにスケジュールを調整するなど。祖母の世話も日程を変える、あるいは家族の他のメンバーとの分担で対応できるのではないだろうか。

このような事情の発生に対して、欠席を避ける方向で対応しない、対応できない、対応のスキルを持たない学生や、出席でなくその事情の方を優先する学生は大学教育を受ける準備が十分にできていない学生と考えられる。欠席の言い訳は日米で類似している。

欠席を学生が主体的に、各種の条件のもと、自分が置かれている社会的環境のなかで個人の価値観とアイデンティティ、所属集団の社会規範、親密な他者の意見などを総合的に判断して行う行為だとした場合、欠席防止にはどのような方策が考えられるだろうか。

4 授業改善の試みと学生の欠席対応

4.1 準備不足学生と欠席の実態について

筆者は2018年に準備不足学生が多い授業の実施方法の改善を試みた。その中で明らかになった準備不足学生の欠席に対する対応の実態に関するデータ分析の結果を紹介する。学生が欠席により単位をとれない状況が明らかになった。

4.2 背景

筆者は長らく国立大学に勤務していたが、2015年から特任教授として文系私立大学（以下A大学）で教鞭をとるようになった。そこでの授業体験はそれまでの授業体験と大きく異なっていた。

学生の受講態度について、次のような学生が少なからずいることに気付いた。その数は科目や授業やタイプにより異なるが数パーセントから50パーセントを超えることがあり、授業の円滑な運営の支障となった。

- ・ 欠席者が多い
- ・ 遅刻者が多い
- ・ 私語が多い
- ・ 授業中にスマホで遊んでいる学生がいる
- ・ 教科書を持ってこない
- ・ 教科書を買っていない
- ・ ノートや筆記用具を持ってこない
- ・ 授業中に教室を出て行く
- ・ 課題（宿題）を提出しない
- ・ 提出の期日を守らない

持ち込み自由の期末試験でも、ある科目では教科書、ノート、授業中に配布した資料などを何も持ってこない学生が10%ほどいた。

授業は学生の意図的行動（私語、ゲーム、飲食など）や「やむを得ない理由」（遅刻、忘れ物や用便のために教室を出る）による行動によって中断されたり学生の受講に支障が生じたりする。口頭で叱責したり注意を促したりするとその度に授業が本題から逸脱する。まじめに授業を受けている学生の中には、教員の不真面目な学生への対応によって授業が中断されることや、教員が学生を叱責したり皮肉を言ったりする姿を見るのを不愉快だと感じる学生がいる。教員は「問題学生」が相当数いて授業が円滑に進まない場合でも、それ以外の学生たちに質の良い授業を行う義務を果たさなければならない。授業に支障がある問題状態が続けば教育の質の維持は難しくなる。筆者はこのような授業の改善を試みた。

4.3 ノート提出課題による授業の質の向上の試み

A 大学で筆者は2018年に、勉強したい学生の学習の支援を強化する授業計画を企画し実施した。企画の要点は次の通りである。

授業の5回目終了時のノート提出を課した。提出者には最大50点を与えることにした。期末の最終試験（筆記試験、持ち込み不可）を実施し50点満点とした。A大学では学則で100点換算で60点以上が合格である。ノートを提出すれば50点取れるから最終試験で10点以上取れば合格となる。

それまでの観察で、ノートを取らない、ノートを持参しない、ノートの取り方を知らない学生が多いことに気付いた。この大学の学生は卒業後、ビジネス系事務系の職業に就く可能性が高い。ビジネスで使われるA4判の書類を書式どおりに作成する作業に慣れている必要がある。そこでA4判のノート作成の書式と形式を指定し、ノート提出の課題を与えた。

4.4 実施の詳細

4.4.1 書式の指定

A4判のノートを使う。表紙に授業科目名、学生番号、氏名を記入、1ページ目には配布するシラバス（A4判1枚）を糊で貼る、以後、1回の授業に見開き2ページを使う。毎回A5判（1/2ページ）の課題を印刷した資料（以下、プリント）1枚を配布し、見開きの左ページに貼るように指示した。

4.4.2 プリントの内容

毎回3～5問の筆記試験を想定した設問をプリントに載せた。設問は基本的に選択問題、短文で答える記述式問題、文章中の空欄に適する語句を記入する穴埋め問題の形とした。

プリントの余白には教科書には載っていないが設問の理解を助ける図、表、教科書以外の書籍やウェブ、政府報告書などからの引用文を掲載した。

4.4.3 授業の進め方

授業は毎回、最初にプリントを配布し、授業全体の説明、設問の解説と回答の口述、板書あるいは教科書の該当箇所の指摘と、その説明、関連する事柄の解説、紹介を行うという形で進めた。

筆記式の設問の解答が短い場合はプリントの解答欄に記入、長くなる場合はノートの右ページに記入させた。学生が記述する文章の分量は負担を考え1回の授業で200字～500字とした。設問の追加的な解説や学生が必要と思ったことのメモなどは右ページに自由に書かせた。

設問は高校レベルの教科書の知識や国語、英語、数学などの学力が不足していても答えられるものにした。基本的に設問ごとにその意味を解説し、解答を記入させた。解答が教科書にそのまま載っている場合はその箇所を指摘した。教科書の文章の中に解答が埋め込まれている場合は文章を読み取って別途解答を作文する方法を解説した。図表などから解答を導き出さねばならない場合は、図表の読み取り方とそれを文章化する指導を行った。課題の解説とその解き方の解説に徹し、「立派な」ノートづくりを指導した。

初回から最後の回まで丁寧に指導した。大学生でなくとも、忘れ物をせず、遅刻欠席せず、指示にしたがって作業をすれば誰でも立派なノートが作れるような授業を心がけた。毎回、授業の中ほどと最後に質問時間を設けた。

この形式の授業は、伝統的な講義形式の授業を踏襲したものである。教員が講義を行い、教科書を解説し、重要な項目を板書、あるいは口述してノートに記述させるという授業は近年、批判されることが多いが、学生に専門科目について基本的知識を学ばせ、専門用語を使った整った文章を書く練習をさせるという目的には必ずしも悪い方法ではないと考える。準備不足学生を対象にアクティブラーニング、反転授業、ルーブリック (rubric)、クリッカーなどの新しいティーチング・ツールを使った授業を行うことは、教員も学生も負担が大きく、成果が上がるかどうか不安を払拭できないためこの試みでは用いなかった。

4.4.4 課題と評価

プリントは毎回、出席している学生全員に1枚ずつ手渡した。遅刻者、欠席者への事後配布は行わないこととした。授業の5回目の終わりにノートを提出させ、指定した書式通りのノートに5回分のプリントを貼り、解答を正しく記入してある場合、50点を与えた。

4.4.5 欠席者の扱い

A 大学にはマークカードを使った欠席調べの仕組みがあるが、カードを回収し教務課に依頼して結果が戻ってくるまで10日から1ヵ月かかるため、実用的でない。授業で出欠調べは行わなかった。欠席が最終的な成績評価に直接的に影響することはない仕組みの授業を行った。遅刻や欠席の理由を裏付ける書類(診断書、病院の支払いレシート、交通機関の遅延証明書、葬儀通知など)の提出は求めなかった。

欠席したり遅刻したりすると、その理由を問わず、その回のプリント(授業の最初に配布

する)が入手できないこととした。提出ノートは指定した書式で作り、全ての回(5回分)のノートを貼付し、解答を書き込んでいなければ満点(50点)にならない。

実際問題として、15回全ての授業に遅刻せず、欠席せずに出席するのは、条件に恵まれていなければかなり難しい。大学生の場合、健康上の理由、家族・友人・部活動・アルバイトなどの都合でどうしても欠席せざるを得ないことがある。そのような欠席はやむを得ないが、欠席した回の授業は受けられず、ノートをとることもできない。しかしどの授業でも整ったノートは期末試験対策になくしてはならない。

伝統的に大学生は試験対策として人間関係のネットワークを利用し友人と相互に助け合っ
て来た。そこで、ノートに貼付するプリントは本物でなくとも良いこととした。授業受講中
の学生たちは孤独な学習者であってはならない。プリントはコピーでも手書きの筆写でも構
わないから、最終的に自分のノートを完成させ、5回目にそれを提出すれば50点獲得可能な
仕組みとした。

4.4.6 ノートの返却と成績評価について

社会学関係の後期の2つの授業でこの試みを行った。学生には初回以降、毎回、ノート提出を予告し、書式やノートの取り方などを繰り返し説明した。

ノートの評価結果は授業の改善と教授法の研究に個人が特定されない形で使うことがあることを伝えた。利用を望まない学生は申し出により分析に使わないこととした。2つの授業で1名の申し出があったため、当該学生のデータは対象から除外した。なお、分析では個人情報扱うがA大学には調査の可否を審査する倫理委員会などの仕組みがないため、筆者が所属する学会の倫理規定に従って研究を行った。

4.5 実施の結果

実施結果は次のようになった。授業科目は受講学年が指定されているが指定学年以上の学年の学生も受講可能である。

・科目A(1年生対象)

登録数90名(4年生1名、3年生2名、2年生9名、1年生78名)

ノート提出者83名(92%)、最終試験受験者54名(60%)、最終合格者48名(52%)

・科目B(2年生対象)

登録数96名(4年生6名、3年生9名、2年生81名)

ノート提出者49名(51%)、最終試験受験者39名(41%)、最終合格者36名(38%)

いずれも段階ごとに学生数が減って行き、最終的に半数前後が合格した。6回目にノートを返却し、以後、それまでと同じ形式で授業を行い、最終試験を行って合否を決めた。6回

目以降、出席者は少なくなり、私語、遅刻、途中退出などの学生が減った。最終試験の答案も設問の意図を正しく読み取って正解を書いた学生が多く、授業改善の目的はおおむね達成されたと考える。ただしこの試みでは欠席する学生、欠席による損失を補うスキルを持たない学生、損失を補おうとしない学生を救うことはできなかった。それが悔やまれる。

4.6 考察

最終の試験問題は毎回のプリントの設問（合計 40 問）の中から選んでそのままの形、あるいは答えづらいものについては簡単な形に修正して 5 問出題した。筆記試験での不合格者は明らかに勉強をしなかった学生と考えられる。その答案を見ると、何も書いていない、あるいは全く見当違いの事柄を書いているものが目立った。

最終的にそれぞれの科目で 48%と 62%の学生が脱落した。不合格の原因は大学入試で問われる科目に関する学力不足や国語、算数・数学に関する基礎学力不足にあるとは言えないだろう。大学生が従うべき規範に従わないという方針を選んで不合格になったと言えるだろう。

学力について確認しておこう。政策レベルで「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」（中央教育審議会 2014）では学力は単に知識や技能ではなく、次の三要素からなると解説している。

- 基礎的な知識・技能
- 思考力・判断力・表現力等の能力
- 主体性・多様性・協働性

確かにこの意味での学力不足は、欠席や学習意欲低下など、好ましくない学生行動を誘発するだろう。しかし抽象的すぎて、授業担当教員としては適切な対応策を講ずることができない。例えば判断力がない、あるいは判断力が不足する学生をどう指導すれば「良い学生」になるのだろうか。

不合格になった学生は、授業を受ける、欠席分を埋め合わせる、試験の準備をするといった行動をとりたくない、できない、やり方を知らない学生、つまり準備不足学生だと考えた方が対処法を考えやすい。オサリバンの主張を借りれば、欠席という状況は何かの特定の原因のために引き起こされるのではなく、学生の主体的意図的な行動の選択により生じる。その防止策の検討には学生の内面的な判断の過程を考慮する必要がある。

5 準備不足学生の大学文化への適応支援

5.1 中退原因としての人間関係のネットワークの欠如

中退理由では経済的困難や学力不足が大きいですが、これは授業担当者としては対応ができない。ノート提出課題の結果分析から、不合格になる学生は、準備不足学生に相当すると思わ

れる。ここでは欠席や遅刻による不利益の挽回を支援する友人たちを持っていない可能性が大きいという知見を得たので、学生の人間関係のネットワークについて考察する。

大学生生活を友人なしに孤独に過ごすのはつらいことだ。大学は学生同士が助けあって単位を取得する場である。筆者は大学生は学習グループを作ったり、同じ授業を受講している学生と新たに友人となり、欠席した場合に助けあったりするのが普通であると考え。大学は暗黙的に学生の相互助け合いを前提に教育の仕組みを作っている。この仕組みへの対応ができない学生は人間関係のネットワークを作るスキルが乏しい学生であって、満足した学生生活を送るのが難しいと考えられる。

5.2 学生の成功とクセオの原則

アメリカでは「学生の成功」(student success)が高等教育の重要な使命とされている。準備不足学生は成功できない恐れがある。クセオ(Cuseo 2007)によれば学生の成功とは学生にとって好ましく望ましい成果で、次のような目標を達成することである。

- (1) 中退せずに学業を続けること
- (2) 大卒資格を取るか【2年制のコミュニティカレッジの場合】4年制大学に編入すること
- (3) 学業不振による仮進級通告を避け、できれば成績優秀表彰を受ける
- (4) 順調に進級・卒業して望みの職業に就く
- (5) 全人的な成長(大学での経験を経て全的に成長すること)

学生の「全人的発達」(holistic development)には次の要素がある。

- a) 知的発達 (Intellectual Development) : 知識獲得、コミュニケーション方法、学習方法の学習、深い思考法が発達すること
- b) 情緒的発達 (Emotional Development) : 【自分の】情緒を理解し、コントロールし、表現する技術が発達すること
- c) 社会的発達 (Social Development) : 自分と関係ある様々な人々との人間関係の質の向上、リーダーシップの技術、市民生活改善への関与ができるようになること
- d) 倫理的発達 (Ethical Development) : はっきりした価値観を確立すること
- e) 身体面の発達 (Physical Development) : 身体についての知識の獲得とそれを自分に適用し、病気を予防し、健康を維持し、身体状態を好調にすること
- f) 精神的発達 (Spiritual Development) : 個人の【生きることの】意味、人間存在の目的、物質的世界を超越した世界に関する疑問の探求の価値がわかること

学生の成功に関するこのような見方は、「良い大学」に入り、「楽しい学生生活」を享受し、

「有名企業」に就職し、「高額報酬と豊かな生活」を送ることである、という日本でよく聞く世俗的な大学進学目的とは大きく異なっている。日本的な考え方では大学教育には大きな意味がないことになる。

5.3 成功に必要な7つの原則

以上の説明に加えて、クセオは高等教育の教授実践とその研究と理論から得られた学生の成功に必要な「7つの最も重要な原則」を示している。これらの原則が守られず、実行されていなければ学生は成功することが困難になる。

- (1) 個人的承認 (personal validation) : 学生が大学で歓迎され、個人として認識されて、大学にとって重要な存在だと認められていること。大学が学生を個性ある存在と認めず、重要でなく力のない人物として扱っていると学生は成功していると感じられない。
- (2) 自己有効性 (self-efficacy) : 勉学や個人生活でうまくやろうとする努力が効果があり有効と思えること。学業成績を上げたりプライベートな学生生活で楽しく暮らしたりすることについて自分の努力が有効であると思えれば成功感が高まる。
- (3) 目的感 (sense of purpose) : 大学で経験する事柄の意味や目的を見いだしていること。大学で学んでいる事柄と現在の生活や将来の目的の間に納得できる関連があると感じることができれば成功していると感じられる。
- (4) 積極的関与 (active involvement) : 勉学のプロセスに積極的に関与することができていれば成功の確率は高まる。教室の内外で大学生としての生活につき込む時間とエネルギーが多いほど成功の可能性は高まる。
- (5) 反省的思考 (reflective thinking) : 大学で学んでいる事柄をすでに知っている事柄や過去の経験と関連付けて考えることができれば勉学が成功していると感じることができる。
- (6) 社会的統合 (social integration) : 学生が大学コミュニティ (同級生、大学教員、職員、管理者) と個人的な人間関係、協働行為、私的なつながりを持っていると、成功の確率が高くなる。孤立感 (独りぼっち感) や疎外感 (のけ者にされているという感情) は中退を促しやすい。自宅通学生よりも大学構内の寮や大学近辺の友愛クラブで共同生活する学生の中退率はずっと低い。
- (7) 自己認識 (self-awareness) : 自分自身の思考について気付き、学習のスタイルと学習す

る時の癖に気付くことができれば学生の成功が促進される。

クセオが論じているのは、学生が大学で成功するための条件である。学生の学力不足、経済状況、学習意欲のあるなしなどの学生の固定的属性ではなく、学生と他の学生や大学組織とのダイナミックな関係の重要性を指摘している。中退防止には学生の心身の発達と大学社会への適応を助ける組織・制度を作って学生を支援する必要がある。

大学の特質や学生の特徴は大学ごとに大きく異なっているが、いずれの大学でも学生の成功は実現すべき最上位の目標である。クセオの学生の成功のための7原則をかなえるための大学の組織と仕組みの構築と教職員の役割はそれぞれの大学で検討しなければならない課題である。

5.4 準備不足学生の大学文化への適応

中退問題の背後にあるのは準備不足学生の大学文化への適応の問題である。大学はエリート層の教育機関として成立し、上位ミドルクラスの価値規範、生活様式を基準に設計されている。勤勉、集団参加、創造性、独創性、積極性などの特質を高く評価する。学生が身に付けている文化と内面化している規範が大学のそれと異なっている場合、あるいは大学入学の時点で大学文化と大学規範への同調が十分でない場合、準備不足学生が生まれる。2つの規範が衝突している場合、学生が大学規範と異なる規範に従うと欠席が生じやすくなる。

大学で成功するには上位ミドルクラスの文化を基本としている大学文化の規範（ルール）に従わねばならない。この文化への同化が遅れている学生が準備不足となる。学生は完全に同化内面化はしなくとも、少なくとも大学が想定している基準や大学文化がどんなものか知り、さらに自分自身の在り方、アイデンティティ、自分が従っている規範と一般的な社会規範や大学規範との相違の度合いを知る必要がある。

エリート出身でも上位ミドルクラス層出身でも、自分が身に付けている文化や規範が大学のそれと異なっている部分を持つことは珍しくない。その違いにどのように対処するかというスキルも自分の持つ文化に含まれている。自分を変えずに違いを気にせずに押し通す場合もあれば、大学文化の基準にいやいやながら、あるいは進んで適応する場合もある。この過程自体を理解することも大学で学ぶべき重要な事柄である。豊かなミドルクラスをめざすにはミドルクラスの文化に適応せねばならず、大学文化はミドルクラス文化を反映しており、学生はそのルールに従わねばならない。

学生は何よりもまず大学内で人間関係のネットワークを作り、試験に合格する努力をしなければならない。高校卒業時のままの自分らしさが大学文化の基準と異なる場合、自分のアイデンティティや行動方針を維持したまま大卒資格を得て、高い賃金と良い待遇をもたらすミドルクラス向けの職業に就くことは難しい。欠席理由もミドルクラスの規範に合致していなければならない。欠席はできるだけ避けて、友人たちと協力しあって欠席した場合の損失

を埋め合わせる術を学び、それを実践できなければ、中退の可能性は高くなるばかりである。

今から10年ほど前、嘉悦大学における中退防止改革が世間の注目を集めたことがあった(朝日新聞インタビュー記事 2009)、(岩崎 他 2016)。嘉悦大学では次のような改革を行った。

- 24時間、キャンパスを開放し、いつでもいつまでも大学に居られる仕組みを作った。
- キャンパス内でもアルバイトができるよう、人材開発センターのようなヒューマン・リソース・センター(HRC)を作った。
- 初年時教育として体験型オリエンテーション「キックオフラリー」を入学式前に開催し学生が教職員と他の学生と知りあう仕組みを作った。
- 1年生ゼミで学園祭の模擬店参加も必修とし、ゼミで協力して学園祭を成功させることをめざした。

学生の人間的な成長を支援し、人間関係のネットワークに参加させ、大学に居場所を作り、学生に大学に愛着を持たせ、結果的に中退をさせない大学作りをめざすこのような対策は、クセオの原則や欧州委員会の報告書にある積極的な中退対策に通ずる特徴を持っている。

この試みは導入時はニュースにあるように著しい中退率の低下をもたらしたが最終的に卒業時点で中退率を大きく下げるまでには至っていない。その理由は、中退には様々な要因があり、嘉悦大学の試みはその幾つかへの対応には成功したが、コントロールしきれなかった要因が残っていたためであろうと推察されるが、この推測は仮説として今後の研究で検証したい。

6 おわりに

高等教育は大衆化からユニバーサル化の時代を迎え、ミドルクラス層にとっては子どもを大学に進学させることは、エリート時代のような「特権」でも、大衆化時代の「権利」でもなく、「義務」の様相を帯びている。今や高卒の若者が大学進学しないには特別な理由が必要になっている。

大卒資格を持った高学歴者の数は増えたが、大卒資格で手に入る賃金プレミアムは中卒、高卒学歴と比べて依然として大きく、芸術、スポーツ、工芸、技能などの分野で特別な能力を持たない大部分の若者にとっては大学進学し卒業することは、その後のキャリア設計にとって避けて通れない関門である。

他方、同世代の過半数が進学することになれば、多様な若者が大学生になり、準備不足学生も多く含まれる。本稿では準備不足学生の欠席の問題を取り上げ、それを手がかりに学生が入学後に大学コミュニティに参加し人間関係のネットワークの中で他者と交流しつつ勉強することの重要性を指摘した。大学が学生の人間関係のネットワークへの参加を支援する仕組みを整備することが欠席防止にも、中退防止にも役立つのではないだろうか。

(注記) 本稿は2019年度大学教育学会大会及び日本教育学会大会での研究発表に基づきそれをさらに発展させたものである。

参考文献

- [1] 朝日新聞 (2009)「嘉悦大学学長 加藤寛氏」(インタビュー記事 2009年8月1日)
- [2] 岩崎保道・宮嶋恒二・蔭久孝政・福島謙吉・谷ノ内識 (2016)「中途退学の防止についての一考察」高知大学教育研究論集 20:49-60 <https://www.kochi-u.ac.jp/daikyo/publication/pdf/pedagogics05.pdf> (retrieved 2019/9/20)
- [3] 中央教育審議会 (2006) 我が国の高等教育の将来像 (答申) 平成17年1月28日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm (retrieved 2019/9/20)
- [4] 中央教育審議会 (2014) 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について (答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm (retrieved 2019/9/20)
- [5] 西森俊之 (1999) 大学の授業における態度と数学教師の対策—日本数学会のある調査より—『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』6 https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/29734/1/6_P1-31.pdf (retrieved 2019/9/20)
- [6] 濱名篤・川島太津夫・山田礼子・小笠原正明 (編著) (2013)『大学改革を成功に導くキーワード30』、学事出版
- [7] 文部科学省 (2005) 経済的理由による学生等の中と退学の状況に関する実態把握・分析等及び学生指導に対する経済支援の在り方に関する調査研究報告書 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/_icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1371455_1.pdf (retrieved 2019/9/20)
- [8] 文部科学省 (2016) 経済的理由による学生等の中途退学の状況に関する実態把握・分析等及び学生等に対する経済的支援の在り方に見る調査研究報告書 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/_icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1371455_1.pdf (retrieved 2019/9/20)
- [9] 文部科学省 (2019)『平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm (retrieved 2019/9/20)
- [10] 労働政策研究・研修機構 (2015) 大学等中退者の就労と意識に関する研究、独立行政法人 労働政策研究・研修機構、2015年5月 <https://www.jil.go.jp/institute/research/2015/documents/0138.pdf> (retrieved 2019/9/20)
- [11] Child, D. (2006) Some Reference Groups of University Students, Educational Research <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/0013188700120209> (retrieved 2019/10/24)
- [12] Cuseo, J. (2007) Student Success: Definition, Outcomes, Principles and Practices The Big Picture 2007 <https://www2.indstate.edu/studentsuccess/pdf/Defining%20Student%20Success.pdf> (retrieved 2019/9/20)
- [13] European Commission (2015) Dropout and Completion in Higher Education in Europe https://supporthere.org/sites/default/files/dropout-completion-he_en.pdf (retrieved 2019/9/20)
- [14] Gabriel, K.F. (2008) *Teaching Unprepared Students: Strategies for Promoting Success and Retention in Higher Education*
- [15] McNair, T.B., Estela Bensimon, Michelle Asha Cooper, Nicole McDonald, & Thomas Major, Jr. (2016) *Becoming a Student Ready College: A New Culture of Leadership for Student Success*
- [16] O'Sullivan, S., Léan McMahon, Gemma Moore, Diane Sabenacio Nititham, Amanda Slevin, Christina Kelly, Lisa Wixted "I Did Not Miss Any, Only When I Had a Valid Reason": Accounting for Absences from Sociology Classes First Published October 10, 2014 Research Article <https://doi.org/10.1177/0092055X14554879> (retrieved 2019/9/20)
- [17] Tinto, V. (1987) Leaving college: Rethinking the causes and cures of student attrition. ERIC <https://eric.ed.gov/?id=ED371658> (retrieved 2019/10/24)
- [18] Williams, W.L. (1954) What the Colleges are Doing About the Poorly Prepared Student, *The American Mathematical Monthly* Vol. 61, No. 2 (Feb., 1954), pp. 86-88

(2019年9月30日受付、2019年10月29日再受付)